

生徒が自分の文章を推敲する場面設定の出題で、 傍線部の内容を正確に言い換える力が求められた

共通テスト 第1問 問6 (i)

- 問6 授業で本文を読んだSさんは、作品鑑賞のあり方について自身の経験を基に考える課題を与えられ、次の【文章】を書いて、その後、Sさんは提出前にこの【文章】を推敲することにした。このことについて、後の(i)～(ii)の間に答えよ。
- 【文章】
- 本文では現実を鑑賞の対象とすることに注意深くなるよう主張されていた。しかし、ここでは作品を現実世界とつなげて鑑賞することの有効性について自身自身の経験を基に考えてみたい。
- 小説や映画、漫画やアニメの中には、現実が存在する場所を舞台にした作品が多くある。そのため、私たちは作品を読み終えた後見終わった後に、実際に舞台となった場所を訪ねることで、現実空間と作品をつなげて鑑賞することができる。
- 最近、近くの町がある小説の舞台になっていることを知った。私は何度もそこに行きたいところがあるが、これまでは何も感じることがなかった。ところが、小説を読んでから訪ねてみると、今までと別の見方ができ、面白かった。(a)
- このように、私たちは、作品世界というフィルターを通して現実世界をも鑑賞の対象にすることが可能である。(b)
- 一方で、小説の舞台をめくり歩いてみたことにより小説のイメージが変わった気もした。(c) 実際の町の印象を織り込んで読んでみることで、作品が新しい姿を見せることもあるのだ。(d) 作品を読んで町を歩くことで、さまざま異なる発見があった。
- (i) Sさんは、傍線部今までと別の見方ができて、前後の文脈に合わせてより具体的な表現に修正することにした。修正する表現として最も適当なものを、次の○①～○④のうちから一つ選べ。解答番号は 10。
- なげない町の風景が作品の描写を通して魅力的に見えてきて
- その町の情景を思い浮かべながら作品を新たな視点で読み解けて
- 作品そのままの町の様子から作者の創作意図が感じられて
- 作品の情景と実際の風景のずれから時間の経過が実感できて

第3回ベネッセ・駿台マーク模試 第1問 問6 (ii)

- 問6 授業で【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んだSさんは、考えたことを文章にまとめた。次の「Sさんの文章」はその文章である。これについて、後の(i)～(ii)の間に答えよ。
- 【Sさんの文章】
- オノマトペとは、例えば猫の鳴き声を「ニャーニャー」と表し、ニワトリの鳴き声を「コケコッコ」と表すような言葉である。これは、実際の鳴き声をそのまま言葉に写し取ったものとして成立した言葉であり、その点では X の一種だと言える。
- しかし、ニワトリの鳴き声は、英語では「cuckoo」であり、フランス語では「coucou」という。ニワトリの鳴き声という対象自体は世界のどこでも変わらない同じであらうが、それぞれの言語で異なる記号で表されるのである。この点では、オノマトペには Y に近い面もあると考えることができる。
- このように、対象と記号との間に、隙間があるのが、人間の言語記号の大きな特徴である。オノマトペで右のようになります。隙間がある。通常の言語であればその隙間はより大きい。だが、それが人間の言語の長所でもある。
- (ii) Sさんは、傍線部「通常の言語であればその、隙間はより大きい。だが、それが人間の言語の長所でもある。」について、【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を踏まえてより詳しい内容に書き改めたいと考えた。それはどのような内容になるかを考え、最も適当なものを、次の○①～○④のうちから一つ選べ。解答番号は 12。
- 人間を用いる言葉の大半は、個物を指し示すことができないという限界を持っている。だが、だからこそ人間の言語は、事物を表す。一次的言語から観念を表現する二次的言語までの幅をもちつつ、語彙の数を有制限に抑えて学習を容易にすることができたのである。
- 人間を用いる言葉の大半は、同じ対象を異なる記号で表す言語の違いによって文化間に伝播を生み出すものである。だが、だからこそ人間は、写真や動画といった映像文化を発展させ補完的に利用することで、文化間の相互理解をはかりつつ来たのである。
- 人間を用いる言葉の大半は、それが表す現実そのものではない恣意的な記号である。だが、だからこそ人間の言語は、一般的な法則にもとづく制度化された観念のみでなく、唯一無二の存在としての個々人の感情や思考を表現するものともなり得たのである。
- 人間を用いる言葉の大半は、音と意味との間に必然的なつながりがない記号である。だが、だからこそ人間は、原始的な階級から発展して多くの語彙を持つようになり、高度に抽象的な思考や文化へと異なる言語の多様性を有するようになったのである。

両者の問題とも、生徒が書いた【文章】の一部に傍線が引かれており、傍線部の内容と各選択肢の内容との整合性を正しく判断できるかどうか問われた。いずれも「書く」という言語活動の過程が意識されており、文脈を適切に理解したうえで、より具体的に説明する力が求められた。